
偽霸王と白髪少年

偽者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽霸王と白髪少年

【Nコード】

N4276BA

【作者名】

偽者

【あらすじ】

【Aパート】St・魔法学院中等部に通う少年、エルヴィン・フルヴィアは、日課となっている親友との戦闘訓練のため、今日もいつも通りミッドチルダ中央第四区公民館、ストライクアーツ練習場に来ていた。ところが少々エルヴィンはミスをしてしまい、親友砲弾で他の人に迷惑をかけてしまう。慌てて謝る彼の前に現れた一人の碧銀の少女が、エルヴィンが使う霸王流に気がついて……。霸王の血を継ぐ正統後継者たる少女と、霸王流が使えるだけの少年が出会い、戦い、そして……。この作品はSS検索・投稿掲示板

A r c a d i aにも投稿させていただきます。

第一話Aパート『吹っ飛びからの出会い』（前書き）

文章の練習作です。

オリキャラが二名程です。

それにもなった設定改変が幾つかです。

以上の内容がよろしければ、どうぞ。

この作品を楽しんで頂いて、ついでに「途中の詩っぽい短文がダサい、消せ」とか「タイトルが悪い。変えろ」とか「ギャグが笑えん」とかでもいいので、感想や意見など頂ければ、自分にとっても幸いです。

第一話Aパート『吹っ飛びからの出会い』

ザンクト・ヒルデ魔法学院。

名前の略称はSt・ヒルデ。

ミッド郊外に位置し、首都クラナガンから快速レールウェイで北へ一時間ほどの距離にある、聖王教会系列のミッシヨンスクール。

初等教育を行う初等部が五年制、中等教育を行う中等部が三年制で設置されており、更に上位の教育も二年おきに進学が可能。最終的には学士資格まで習得可能な大型学院。

当然というべきか、聖王教会系列ということもあってこの学校には礼儀正しい者が多く、子供とは思えないお嬢様、お坊ちゃんぶりを見せる者も多い。人によっては場違い感を強く抱き、おどおどしてしまうだろう。

そんな「ごきげんよう」などという挨拶が平然とあるこの学校の、中等科校舎の廊下を、一人の少年が歩いていた。

学校指定の制服を着込んだ、十二歳程度の少年。

他にも制服を着た生徒達が歩いている中で彼が一際目立つのは、なんといつでもその頭髮が原因だろう。

まるで純銀を叩いて伸ばしたかのような、美しき髪。男性が持つには余りにおごがましいとさえ思えるその髪は、ロクな手入れもされていないというのに、太陽の光を受けて眩しく輝き、風を受けて

草原の草のようになびく。彼が歩きたびに、周囲へと光を撒いていくような錯覚さえ覚える程だ。

そして銀の前髪の下に見えるその眼は、海のごとく蒼色に染まっております。将来はそれなりの美男子になるのは間違いないといえた。

「——クソツタレ、なんで遅刻の十や二十で反省文五十枚も書かなくちやならねえんだ……」

ただし、性格と頭が少々残念だったが。

■

「それはエルが悪いよ」

「そう言われてもなあ……。朝眠いもんは眠いんだし、朝寝とかないと授業中に寝ちまうし……」

「そこは夜寝ようよ」

自分の親友に待ち合わせに遅れた理由を言うと、苦笑しながら呆

れられた。

学校でも遅刻した少年、エルことエルヴィン・フルヴィアは、チツと舌打ちしながら不機嫌そうに愚痴をこぼす。

今日は授業もちよつと早めに終わり、二人でさっさと下校してしまふ予定だったのだが、エルヴィンの自業自得な用事の所為で、余り普段と変わらない時間で下校することになってしまった。

そのことが本人もよく分かっているのか、頬を居心地悪そうにエルヴィンは掻き、

「俺でも朝起きようとは思ってたよ。でも幾ら目覚まし時計をかけておいても、起きたら何故か粉々になっちまって……、だからきつと俺を起こさないために何者かが目覚ましを破壊しているに違い無い。きつとそうだ、そうだろ？」

「そんな現代社会系目覚まし破壊狂人なんか居る訳ないから。エルもさ、素直に先生に謝ればいいじゃないか。そんな言い訳ばかりするから、反省文書かされたりするんだよ？」

『恐らくエルヴィン様が初めてでは無いでしょうか、St・ヒルデ学園において連続遅刻回数二十三回などという大記録を打ち立てたのは』

その愚痴も、親友レックス・ネルソンとその胸元に存在する愛機「ライト」に封殺された。

白い髪と紅い瞳が特徴的な初等部四年生の、成績優秀容姿端麗才色兼備文武両道という実にパーフェクトな年下の親友に対し、彼より身長は高いというのに性格的に見て年下に見えてしまうエルヴィンは顔をしかめ、

「いや、先生のピクピクするこめかみを見ると、つい」

「ついても何も無いと思うんだけど。駄目だよ、ちゃんと謝らなきゃ」

『目先のことを後回しにして、更に悪化させるタイプですねエルヴ

イン様は』

……このデバイス、なんか俺に恨みでもありやがんのか……？

いつも通りの優等生っぷりを見せるレックスはともかく、その首にかかった青いクリスタルの遠まわしかつ辛辣な言葉に、この心（AI）を持つ機械に何かしたかと暫し自分の記憶を振り返ってみるも、レックスへとかけた迷惑ならばともかく、このデバイスには特に何もしていない筈だ。

だとすれば自分の優等生な主が不良風味全開の自分と仲がいいこと自体が気に入らないのかも考えつつ、

「ベオウルフ。主人が困ってるんだからなんとかしてくれ」

『残念ながらマスター。昨日貴方が『ミッドチルダ執務官密着二十四時』あの揺れるメロンの秘密はなんだ』などを見ていたのを私は知っているため、庇うことは不可能です。——というかバラエティ番組なんか見てないでさっさと寝ろよゴラァ』

「相変わらずだなオイ」

自分の手首に装着した機械の腕環にフォローを頼んでもみるも、軽く一蹴された。

もう三年以上の付き合いとなるのに、相棒の変らない突き離しっぷりに、ため息を一つ。

この白に金の細かな装飾がなされたデバイスは、何時でも自分に厳しく、ちよつと普通の魔導士とデバイスとの主従関係とは違う気がする。

とにかく、もう二年近くは考えている疑問はさておき、

「まあそんな俺のことはいいとして、だ。レックスの方は今日どうだったんだ？ また一人寂しく便所で飯でも食べてたのか？」

「そんな寂しくて不衛生なこと人生で一回もしたこと無いしする気も無いよ!? ちゃんとクラスの友達と食べたってば!」

『エルヴィン様は相も変わらずふざけた事言ってますねマスター。ちよつと空のドラム缶とコンクリートを用意しませんか?』

さり気に恐ろしいことを言っている親友のインテリジェントデバイスをスルーしつつ、

「冗談だよ、冗談。レックスのクラス内での友達っていうと、あれだっけ? 確か飛行魔法を習得した時に『空が俺を求めている!』とか叫んで三階の窓から跳んで、上に飛ぶ筈が何故か超高速で地面に飛んで首だけ残してめりこんだっていう」

「地面から生えた生首状態だったよ……。女子の何人かはお化けと勘違いして怖がってたけど、たまたま来てたセインさんはお腹を抱えて大爆笑してた」

「あの人の能力使えば似たようなこと出来るだろうしなあ。セインさんの悪戯レパトリーが一つ増えたかもしれない……」

「案外既にかリムさんとかシャンテとかにやって、シャツハさんに怒られてるかも」

「容易に想像出来てしまうのがなんとも……」

何度か行く聖王教会の、そこに所属する水色半袖シスターのことを思い浮かべつつ、二人はそろって苦笑した。

そしてふと前を見ると、大通りが右と左の二つに分かれている。右に行けば、自分の自宅への帰り道。左へ行くと、駅前の方へと向かうことになる道だ。

一旦、エルヴィンは立ち止まり、暫し思案してから、

「レックス、ライト。お前等今日も行けるか?」

「もちろん。普段よりちよつと遅いけど、僕自身には何の問題も無

いよ」

『私も問題ありません』

親友とその相棒の言葉にエルヴィンは頷き、

「んじゃ、無駄話はこれぐらいにしてさっさと行きますか」
『OK, my master.』

左手の相棒からの声を受けて、前を見た。

彼らが向かうのはミッドチルダ市街地、中央第四区公民館。
ストライクアーツ練習場。

幾人もの人々が利用する、公共機関だった。



「すみませーん、ここ使いまーす」

「ああ、すみませーん」

床にマットが敷かれた、巨大な運動をするための場所。

所々にダンベルやサンドバックがぶら下げられていたりする、様々な人が格闘技の練習に使うこの場に、一瞬でトレーニング用の服に着替えロッカーへ持っていた荷物をぶち込んだエルヴィンは、場所取りのために早々と練習場に出ていた。

手首や肩の関節を柔軟しつつ、壁際の一角に移動する。

そこに今だロッカールームで着替えているであろう親友と同年くらいの少女が二名程居たので、取りあえず声をかけて移動して貰った。明るい灰色の髪を持つおしとやかそうな少女に、黒髪金眼の活発そうな少女。

……誰かの付き添いか何かか？

思ったよりも簡単に移動してくれたため、横目に見てそんなことを考えつつも屈伸をして足の腱を痛めないように伸ばす。

準備運動は大事だ。

体が冷えた状態で人間は全力を出せないし、無理に動くと腱や肉を痛めてしまう。

「今日はある程度ストレスたまってるからな。運動で一気に発散しようぜ、ベオウルフ」

『Yes, my master』

グローブの下から響く相棒の声に、ニヤツとした獰猛な笑みを浮かべる。

足のレガース及びシューズにも問題は無い。今日はいつもより力が出せそうだ。

もっとも、

「普段とは時間帯が違っけど」

『マスターのせいです』

「わーってる」

辺りを見渡して、背伸びし、息を肺から吐き出す。

普段、ここに来る際はもっと後の時間か、もしくはもっと早いかな

のどちらかのため、このようなあやふやな時間帯に来たのはエルヴィンもレックスも初めてだ。

おかげで普段は見ない、筋骨隆々のマッスルな男性やらまだ一桁くらいの年齢の少年やら赤髪の女性やら対峙する金髪の女性やら三十歳くらいのエクササイズ目的の女性やら色々な人物が居る。

周囲を見渡しつつ、腕立て伏せをやっていると、

「お待たせ！」

「んっ……おお」

まだ声変わりする前の声が響き、エルヴィンは其方へと視線を向ける。

そこには上半身をピッチリとしたノースリーブの服で覆い、ズボンは短めの短パン、そして自分と同じグローブとレガースをつけた少年、レックスが居た。

その首には、丸く蒼いクリスタルであるデバイスがぶらぶら揺れながらもぶら下がっている。

「軽く準備体操してから、今日はいきなりスパーから入るか。それでいいだろ？」

「いいよ。僕もスパー久しぶりだから、なるべく勘を取り戻したいし」

それじゃ、と言いつつ、エルヴィンはベオウルフが表示してくれた世界時間を見る。

ここが閉まるまでの時間を確認してから顔を上げると、もう準備体操を終えたのか、真正面にデバイスを握りしめたレックスが居た。正直な気持ちを、そのまま吐露。

「はやつ」

「僕、着替えるのいつも遅いから、なるべく早くしようと思って」
『マスターは健気ですね。それに比べてエルヴィン様ときたら……』
「ダメだよライト、そんなこといっちゃあ。エルだって、彼なりに頑張ってるんだから」

「お前等の会話はさらつとスルーして聞くが、もう始めていいんだな？ 後で後悔したりすんなよ？」

「うん。本当に大丈夫」

眼の前の親友は誰の影響を受けたのか、なんでもかんでも抱え込む癖があるが、まあこんなことでは嘘をつかないだろう。

そう思い、彼は左手をゆったりとした動作で掲げる。

瞬間、エルヴィンの足元に、巨大な三角形の魔法陣が展開された。

それは、世の中においてベルカ式と呼ばれる魔法を使うための魔法陣。

剣十字の紋様が風車のごとく回り、力の波動を辺り一帯へと広げていく。

色は銀。それは、彼の魔力の色。彼の髪と同じ、金よりも大人しく、普通の色よりも遥かに輝く神秘の色彩。

エルヴィンは己のリンカーコアから全身に魔力を通し、ベオウルフと言う名の愛機に命令を与える。

力を貰うための言葉を、口から迸らせた。

「ベオウルフ、セエツト、アップッ！」

『Stand by lady, Set UP』

変化は一瞬。

視認など人間には絶対に無理であろう速度と明るさを持ってして、光がエルヴィンの体を包み、変化を巻き起こす。

魔力は練られ、伸ばされ、彼の肉体の外側と内側の両方に魔法学的に干渉し、その形と性質を変えてゆく。その際の余波で風が吹き、僅かにだが逆巻いた。

銀色の光は、やがて前触れも音も無く収まり、

「――武装形態、トレーニングモード」

そこに居たのは、十代後半の青年だった。

肩まで伸びた銀色の髪の毛に、蒼い瞳。少年と呼ぶには高すぎる身長と、傍目からでも分かる身の内の筋力。

その手と足にはストライクアーツ用のグローブとレガース、肘や膝にはサポーターがついており、状況と外見的特長も相まって、彼の正体をあからさまにしている。

『バイタル値問題無し。異常、特にありません』

「サンキュー、ベオウルフ」

装着した腕輪。そこから変わらない相棒の声が響いたことに青年姿の彼、エルヴィン・フルヴィアは満足げに頷いた。

その声はまさしく光に包まれる前のエルヴィンの声であり、口調も身のこなしも浮かべる不敵な笑みも全て変わらない。急激に成長し、肉体自体が大きくなったこと以外には何一つとして変化の無い彼が、そこに居た。

真正古代ベルカ式エンシェントの魔法の一つ――武装形態。

小さき者が大きな者と戦う、もしくは訓練、修行のために生み出された身体強化系の魔法。

単純に肉体が大きくなっただけではなく、その急激な本来ならば年月をかけなければならぬ肉体の変化分を埋めるように筋力や骨

格を魔力で強化し、身体能力を底上げする。

……別にこれ使わずにやってもいいけど、こっちの方が練習になるしな。

魔法だけの練習ならともかく、武術の練習ならばこちらの方が色々便利だ。高度な身体強化の魔法を維持しつつ、そこから生み出される普段以上の筋力やリーチを自分の物とし、普段より更に高度な格闘の修行をする。

武術の訓練には、正にベストな魔法と思えた。

「こっちも準備オッケーだよ」

バリアジャケット

防護服を構築していない自分の肉体を確かめるように眺めていると、若干大人びた声が投げかけられた。

エルヴィンが顔を上げると、そこには先程までと変わらず、青のクリスタルをぶら下げたレックスが――

「やっぱり大人モードはいいね。視線が高いし、手も長い」

居なかった。

代わりに、そこには短く刈った白髪と、血と宝石の輝きを併せ持つ紅い瞳の青年が存在している。

エルヴィン自身、中の下くらいの顔ではあるだろうと自分で思っているが、その青年は彼から見ても上の上と言ってしまっレベルの美青年だった。

身長は武装形態状態のエルヴィンよりも数センチ高く、肌も白い。全体的に痩せ型で、しかどこかしっかりとした芯のようなものを感じさせる、整った顔を体の造形。

その身を包むのはエルヴィンと大差無い、ストライクアーツ用の

グローブやら服であり、それは先程までの親友と同じものだった。

……ミッド式と近代ベルカ式のハイブリット混合術式による身体強化、か。

自分と同じく成長したその姿に、エルヴィンは心の中で呟く。

効果から見ると全く同じに見えて、その実、術式は全く違う。系統も違うし、足元に展開されている魔方陣こそ同じ三角形だが、見るものが見れば分かる通り、真正古代ベルカ式との違いが大きく紋様として出ている。

大人モードとレックスが良く呼ぶ術式は真正古代ベルカ以外の術式に関して殆ど勉強していないエルヴィンに分かるほど、オリジナリティと真新しい理論で構築されていて、しかしどうも彼が作ったのではないらしかった。以前聞いた限りでは、彼の保護者がこの術式を使おうとした知り合い（らしい。深くは知らない）のためにあれこれアドバイスしていたらしく、その作られた術式のデータを貰って使っているそうだ。

……というかレックスって結構めぐまれてるよな。

確か彼のデバイスも保護者のオーバーSランクという、とんでもなく強い知り合いからのデータを元に作られたらしく、自分でつけた名称もなんだか近いところがあるらしい。

……そういう意味では俺もじいちゃんのおかげで真正古代ベルカのデバイスがあるんだし、俺も充分恵まれてるな。

もしかしたら両親が居なかったり、面倒そうな過去を抱えてたりするから、せめてそういう面では幸福にしてやりたいという聖王様の慈愛なのかもな、と適当に考えて、

「さて、なら始めるか。ルールはいつも通り格闘オンリーで、殴り飛ばされたヤツが負けっつーことで。ちなみに負けた方は罰ゲームとして『夕方の紅茶 く豚骨味』一気飲みな」

「うええっ!?!? ……はあ。うん、分かった。ライトもベオウルフも、判定お願いね」

『了解です、マスター』

『お任せください』

それぞれの相棒からの頼りがいがある声と、呆れたような親友の声にエルヴィンは口の端を緩め、

「……ふっ」

短く息を吐き、構えた。

左手を前に、拳を握らずに出し目線の辺りまで上げる。

右拳は腰溜めに構え、肘を曲げて僅かに引くことで、神速を持つてして抜き打ちの一撃を放てるようにする。

両足はしっかりと、僅かに左足を前に出して真っ直ぐ地面に縫い付けるように立つ。

そして鋭き双眸はしっかりと、目の前の相手を見た。

レックスの構えはごくごく普通のストライクアーツの構えだった。両腕を胸の前に揃えて構え、足は規則正しくステップを踏んで、体は上下しながらも軸がぶれない。

……やっぱり隙が中々ねえな。

古来より伝わる自分の武術とは違う、近代の武術。俺の武術に合う流派など無い！ などと言うつもりは無いが、それでも格闘技において最強の一角を誇る自分の武術に自信はあれど、驕りを生ませない程の力がレックスの構えから伝わってくる。

どれだけ強き武具を持とうとも、その者に力無ければそれはただの重りである。

そんなことを生きていた祖父は言っていたが、正しくその通りだ。幾ら武具が強力であろうと特殊であろうと、振るうものが弱ければそれらは何の役にも立たず、真価を発揮することも出来ない。

故に、油断はしない。幾ら強き矛を持とうと、相手に身の内へと飛び込まれ、剣で刺されては意味が無いのだから。

「……」
「……」

無言のまま、時が過ぎてゆく。

お互いに声どころか大きな呼吸音すら立てること無く、ただ相手の動き一つ見逃さないとばかりに眼光を光らせて睨む。

トン、トン、と、マットをステップで踏みしめるレッススの足音だけが、両者の耳に響いてくる。

「なんだ、見たこと無い奴らだなおい」

「構えからして、二人とも只者じゃない。普段はこの時間帯じゃないのかもな」

「ねえ、コロナ。さっきのあれってさ……」

「うん。あの人達、大人モード使ってるよ。しかも、あの術式って

「……」

「……？　なんだか向こうが騒がしいですね」

「何かあったのかな？　っと、それより先にスパーの続きしよっか」

……間合いは約五歩分が。

デバイスの起動で目立った所為か、周囲に野次馬が集まり始めたが、そんな情報はエルヴィンの脳には入ってこない。ただ戦うため

の、必要最低限の情報のみが彼の脳内にて処理され、解析される。

間合いは直ぐにでも詰められるものであり、相手の背後は十歩後ろにクッションが貼られた壁。つまり真正面から押し込んで行つて、壁際に追い込めば此方にとって有利に戦えるということだ。……背水の陣状態で強くなるという可能性も無いことは無いが、レックスはなるべく広い場所で戦いたくなるタイプだと、二年以上の付き合いから分かっている。

つまり、エルヴィンが取るべき行動は、

「……」

トン、トン、と音が響く。

「……」

トン、ト――

「――オオッ！」

「っ！」

突っ走った。

ステップを踏む、状態が僅かに浮き、着地する最中のほんの小さな無の時間。そこに飛び込むがごとく、エルヴィンは突っ走った。

ただし、横に。レックスの側面に潜りこむ様に。

「――ッ！」

レックスが驚く気配を、エルヴィンは足を高速で動かしながら感じとった。恐らく、彼は壁へと追いついたために、エルヴィンが真正面から来ると思っていたのだろう。

だが、そんな驚きでエルヴィンの足は止まらない。腰から上、つまりは上半身を彼はレックスへと向けたまま、足だけを動かして彼から見て左、此方から見て右の側面へと回り込む。

——歩行術、反転歩。

祖父が死ぬ前に教えてくれた真正古代ベルカの武術。それとは別に教えてくれた、幾つもの歩行術。その一つを使い、エルヴィンは敵の死角へと全速力で飛び込む。

両足が力強くマットを踏みしめ、体全体に摩擦抵抗の力が駆け抜けた。

それを撃ち出さんとはかりに、左手が握り締められて引かれ、右拳が前へと突き出された。

その速さは高速。銃弾にも勝る、人間の一撃。

顔面へとほぼ真横から迫るその一撃に、レックスは、

「ッ！」

此方を見ずに反応してのけた。

ただの堪とは思えない程の迷い無き動きで、体全体を膝を曲げることで沈める。

エルヴィンの放たれた拳はレックスの頭上を音を立てて通過し、空ぶることになる。

チッ、と小さく舌打ちしてから、かわされた右拳を引き戻さずに、ほぼ接触状態からの右膝蹴りを放った。

鍛えられ強化された筋力によって放たれた一撃は、しゃがんだレックスへと硬質な音を上げて叩き込まれる。

「っ」

轟音を上げてレックスが吹き飛ぶ。

が、膝から伝わる手ごたえと自分の目が見たものに、エルヴィンは顔を盛大にしかめさせた。

……両腕クロスして防がれたのに、あんなに吹き飛んでたまるか！

膝を引き戻し、構え直しながら目測で五メートルは吹き飛んだレックスの姿を見る。

右膝をしゃがんだ状態で綺麗に受けきった彼は、後ろに吹き飛びながら宙で一回転し、柔らかく着地する。

一連の動きにダメージは全く感じられず、故にエルヴィンはレックスがわざと後ろに飛んだのだと分かった。

……ふわふわゆらゆら、布を相手にしてるみてえだ。

だが、と同時に思う。

自分の武術は、力は、例え相手が布であろうと、鋼鉄であろうと、一騎当千の猛者であろうと、伝説たる存在であろうと、極めさえすれば全てを倒せる力だと。

足に力を込め、体軸を前へと傾け、

「やあああっ！！」

「っ！？」

チャージ
突撃されていた。

此方がやるうとしたことを先にされ、前に出そうとしていた体がぐらつく。恐らく、着地の時既に足を曲げ力を溜め、走り出す準備

をしていたのだろう。そうでなければこのスタートの早さは説明出来ない。

しかも、

……下、左っ！？

屈んだ状態で突撃して来たためか、レックスの体勢はとても低く、屈みでもない限り拳が届かない。更には此方から見て左側にスライディングするように足を突き出して滑り込んでいた。

それは、左足を狙った高速の飛び蹴り。

「まずっ」

即座に右へと小さく足を動かし、超低空飛び蹴りを受けそうになった左足を下げさせてかわす。

が、旋風のごとき追撃が来た。

地面に滑り込むことなく、体全体が浮いた状態で、向こうは左手だけを地面に叩きつけたのだ。その左手を軸にし、一気に加速を用いてレックスは体を回す。

スライディングの伸ばされた足が体ごと回転し、エルヴィンの両足を尻ぐ回し蹴りが迫った。

重く、くらったら足の運びにとてつもない影響を及ぼすであろうその一撃を、慌ててバックステップすることで避けるが、

「まだまだっ！」

下がった所に、両足を四分の三回転させてから、また屈んだ状態でレックスが突撃してくる。そこから生まれるのは、相手の近距離、しかも足元という場所から生まれる下半身を中心とした全身への猛攻だ。

放たれるグローブに包まれた幾重の拳を、バックステップを続けながら両手でさばきつつ、エルヴィンは汗を浮かばせながら思考。

……向こうは屈んで走りながら攻撃して来ているせいで、両足が攻撃に使えねえ。なら、こっちのペースにまきこんで上から叩く！

こっちはバックステップをしつつも足をガードに使えるが、前に倒れそうな体勢で走っているレックスはそうは行かない。

ならば、このフェイントが一つも無い猛攻の防御タイミングをずらすことで相手のテンポを乱し、その間に体勢を立て直す。

一瞬と呼べる時間でそう考えたエルヴィンは、鳩尾目掛けて放たれた拳を、

「ぐっ！」

拳を、【喰らってから】受け止めた。

「！？」

「おらよっ！」

目を見開くレックスを無視して、掴んだ拳を振り払う。

直撃した拳を掴まれ、投げ技を警戒して振り払おうとしたレックスは、エルヴィンの方からも拳を振り払われたため、想定外の速度で拳を引き戻してしまい、重心が後ろへとぐらつく。

かかった、とエルヴィンはそう思い、腹からの鈍痛に堪えながら後ろへと二、三步バックステップして距離を取り――

背中が、壁に触れた。

「んなっ!？」

背中からの感触に、エルヴィンは慌てて目だけで背後を見る。自分の背中が触れているのは、柔らかな怪我防止用のマットが取り付けられた壁であり、それはもう彼の後ろが無いことを意味している。それはつまり……

……死地に追い込まれた!

エルヴィンが先程しようとしていたことを、レックスがやってのけた。

言葉にするならただそれだけのことだが、何時の間にか誘導されていたエルヴィンにとっては、歯をかみ締めてしまうほど焦りを生んでしまう。

……飛び蹴りで左足を狙ったのは、これのためか!

マズイ、と思う。周囲を見ても右にはダンベルなどのトレーニング器具が山ほど詰まれており、左側には野次馬が居る。

左に飛び込めば、野次馬も引いてくれるかもしれないが、不安は大きい。

「なら!」

エルヴィンは前に出る。

右も左も後ろも使えないのならば、前に出るしかない。そう考えて半歩、前に足を出す。

「はぁあああああっ!!」

それは失敗だった。

直ぐ目の前、至近距離に、両手首の付け根を合わせた掌底がさながら槍のごとく放たれていた。

神速。動かすだけで、辺りに衝撃波が吹き荒れるレベルの一撃。

此方が考えている間にレックスは体勢を立て直し、此方へと真正面から突撃してきていた。

「ッ——」

揺れる白い髪。此方を野獣のように観察する紅い目。そして自分の胸元へと迫る両腕からなる一撃。

見るのは一瞬。考えるのも一瞬。動けるのは一瞬以下。

「——！」

直撃する。

■

一拍を置かずに巻き起こったのは轟音だった。

練習場の全域。全てに響くような、体の芯から芯まで震わせるような巨大な音と言う名の空気の振動。

それは見ていた野次馬達の間を、トレーニング器具の間を、壁という壁を、空気に触れし物全てを小刻みに揺らしあげる。ビリビリとした余波が駆け抜ける中、

「……そんなっ!？」

野次馬達がその声を聞いた。

声を上げたのはこの轟音の元となった一撃を叩き込んだ青年に見える、少年。

レックス・ネルソンは、驚愕していた。

彼の力強い踏み込みで大地の力の恩恵を受け、放たれた双掌底。それは壁に追い詰められた敵に直撃し、壁を利用した人間サンドイッチまがいの強烈な打撃となるはずだった。

なる、はずだった。

その手は、見事なまでに壁のマットにめり込んでいる。

最新式の防護マットでさえ衝撃を殺しきれない一撃を放った両腕は、マットに受け止められて柔らかな反発を腕に伝えてきている。

そして、そこに攻撃を当てる筈だった彼の姿は、無い。

右にも無く、横にも無い。

レックスの視界から、エルヴィン・フルヴィアが消えていた。

「何処に……」

腕を引き、数歩下がったレックス。

何も起こらないのを目と耳と肌で感じつつ、無音となった空間全体を警戒する。

壁を走る魔法や技術というのは、実はそれほど珍しくは無い。空戦が出来ない者にとって壁や建物を足場に出来るというのは、どんな状況戦闘においても多大なアドバンテージを得ることが出来るからだ。

ただし、それは全て一瞬のことだ。壁を蹴って相手へと攻め込む。実戦でそうする者は居れど、壁を歩いたり、座り込んだりする者は居ない。それはあくまでも壁を走るというのが、速さと力任せの行為だからである。

身体強化や重心安定のための魔法はあれど、壁を走るためだけの魔法などそうそう無いし、実戦でわざわざ使うとその分のマルチタスクやデバイスのリソースを食われることになる。飛行魔法となんら変わらない。

第一、壁に自由に立ったり座ったりするようなことが出来るのなら、飛行魔法を習得することだって出来るだろう。重力に逆らい、壁を自由に動き回るには、もはや飛行魔法の力が必要だからだ。

だが、エルヴィンの場合は少し違う。

——歩行術、壁面歩。

飛行魔法でもなんでもなく、ちょっとした身体強化の術式と、血の滲むほどの技術により、無意識レベルで壁や天井を走行出来る技術。更には今のエルヴィンのように、壁に立ち続けることさえ可能な技術。彼にとってはもはや当たり前のレベルで出来る技。

しかし、別に彼はレックスにこの技術のことを隠していた訳では無い。

ただ単純に、言う機会とレックスの前で壁を走る機会が無かっただけだ。

……まっ、バックステップで登ったのは始めてだけだな。

自分でも未知の領域だったが、バックステップでも壁を走ることには成功した。

何でもやってみるもんだなと思いつつ、眼下の親友を眺める。

彼はこんな状況に体勢が無いのか、動揺し、隙だらけだ。

……チャンスッ！

エルヴィンはスタートをなるべく目立たせずに走り出す。

その速度は壁を下に行く走りということもあり、普段とは比べ物にならない加速がつく。

重力による加速を身に受けながらあつと言う間に七メートルの壁を駆け下り、床を加速で生み出した力で蹴り飛ばし、一直線に跳んだ。

風を切り、今度は束縛となつた重力を無視し、彼の体は弾丸よりも早くレックスの手元へと接近した。

「——あつ」

ハッ、としたような声を上げ、レックスは慌てて此方へと両手を伸ばすが、

……遅え！

突き出された両手を独楽のように全身を左回転させることで弾き、更に一步踏み出す。

踏み込まれた左足はレックスの両足の間を割って入り、彼の足よりもより奥へと踏み込む。

そして、一拳に接近した冷や汗を垂らす親友の顔を見つつ、エルヴィンは溜めた右拳を解き放つ。

突撃よりも早い速度で、右拳は放たれた。

——霸王断空拳！

彼の十八番の一撃、彼がもつとも得意とする必殺の一撃が、親友の腹へと直撃した。

先の掌底を超える一撃が、ガードなど無い白髪の青年の腹に叩き込まれると同時に、今度は演技でも何でも無くレックスの体が吹き飛んだ。

と同時に、烈風が吹き荒れ、見る者の髪や服などを揺らし、衝撃音が轟音となって轟く。

これが断空。空すらも断つという意味が籠った、一撃の姿。正に必殺と呼ぶに相応しく、そして誰から見ても完璧な一撃だった。

……勝った……っ！

拳を振り切ったエルヴィンも、心中で己の勝利を確信する。

手から全身へと駆ける一撃の感触。それが相手へと自分の全力を間違いないで叩き込んだ証だと、エルヴィンは今までの経験から頷く。これであるギトギトとしたゲデモノジュースを飲むのはレックスだ、とエルヴィンは右拳を掲げたまま勝利の余韻に浸る。

「……マスター。本気でレックス殿が吹き飛んでるんですが大丈夫なんでしょうか？」

「……………あ」

視線を前方上空に向ける。

レックスはくると宙を飛んでいた。

それも既に十メートル以上の距離を高速で。

エルヴィンの脳が、その光景を見て思考回路を全力で働かせた。

レックス一撃を喰らって意識吹き飛びかけ。受身とか体勢立て直すのとか無理。

かなりぶっ飛んでる。それだけスピードと力があるということ。
今大人モード。体重最低でも七十キロくらいはある。

七十キロぐらいの肉と硬い骨の塊が、高速で飛んで誰かにぶつかったら？ 洒落になりません。

[illegible]

今更ながらに気がつく。

ここは公共機関であり、周囲には自分達と同じように訓練している人達が沢山居るのだ。

他人に迷惑や危害を加えてはならない。

こういう場だけではなく、社会においても絶対のルールである。慌てて走り出すと、既に空飛ぶレックスは墜落寸前だった。

やはり推測どおりなのか、意識が殆ど消えかけているように見える。この時ばかりは自分の拳の威力に後悔せざるを得ない。

「あぶなああああ
ああああああい！！」

そして、最悪なことに墜落地点には人が居た。

スパーでもやっていたのか、広い空間に十代後半の女性が三人ほど。

その内の一人、遠目からでも分かる金色の髪が目立つ女性に、モ口に直撃してしまう。

レックス自身は恐らく大丈夫だ。彼が装備しているのはれっきとしたインテリジェントデバイスであり、自動防御やAIによる自己判断機能も付いている。だが女性の方はどうか分からない。

「ッ!?」

女性三人は此方の叫びにすぐさま反応した。叫びながらもエルヴィンはその動きの早さを見て只者では無いと、意識の片隅で考える。どうあがいても間に合わない距離の先。他の碧銀と赤毛の女性は上を見上げてギョツとし、

「――!」

墜落地点の女性は、逃げなかった。

逃げるどころか飛んでくるレックスに対して真っ直ぐに構え、両腕を広げる。まるで向かい入れるように、まるで受け止めるように。

「――」

そして、受け止めた。

直撃を示す、鈍い打撃音が上がる。

受け止める瞬間、レックスの体にかかっていた身体強化の魔法がデバイスの自己判断によって解除され、魔力が解け、何時もの十歳くらいの体へと戻るがそれまでの間に生まれたスピードは無くならず、そのまま女性の胸元に飛び込んだ。

「!」

受け止めた女性はそのまま勢いに弾き飛ばされるように後方へと転がっていく。

その行為を見ていたエルヴィンは人知れず息を飲んだ。

……受け止める反動を最小限に抑えるために、自分から後ろに飛んだ！？

突然心構えも無しに飛来した人間に対しあんな即決かつ一番の選択肢を取れるのか。何故完璧なタイミングで後方に飛べたのか。

自分には無い技術を持つ女性に、エルヴィンは叫ぶのを忘れて注視し、

「バッカヤロウツ！　こんな公共のところでなんつー危険なことしてんだ！」

「すみませんっ！」

赤毛の女性からの怒声に、エルヴィンは全力で頭を下げた。その際に武装形態を解除し、元の体に戻る。

理由は、

……謝る時に素顔じゃありませんとか、礼儀知らずにも程があるしな。

「謝るのはこっちじゃねえだろうが！」

「っ、すみません！　大丈夫ですか！？」

「い、いえいえ……私、大丈夫ですから」

怒号を受けて慌ててレックスを受け止めて転がった女性の方へと謝ると、苦笑いされた。

頭を下げて、上げて、女性が居るであろう場所を見て、ふとエルヴィンは気がつく。

……姿が、変わってる？

先程、レックスを受け止めたのは十代後半の、少女では無く女性と言すべき美しき金髪の映える人だったが、何故か気絶寸前のレックスを受け止めているのはレックスとそれほど年の変わらないように見える少女だった。

左右の瞳で色の違う……虹彩異色が特徴的な、何処かで見たような女の子。

……俺達と同じ、身体強化系の魔法か。受け止めたときに解けちゃったのか。

とりあえず答えを把握してから、謝罪の言葉を連ねる前に、受け止めるというよりも覆い被さった形になっているレックスを引き剥がそうと、小走りで少女とレックスの二人に駆け寄って、

「貴方は……」

「……？」

その、冷静そうな、何処までも氷のイメージを浮かばせる声に振り返った。

それは無意識レベルのものであり、エルヴィン自身が望んだことではない。

しかし、彼はその少女を見る。

恐らく自分と同年くらいであろう、小柄な少女。

自分よりもどちらかと言えば鈍く輝く碧銀の髪をツインテールに縛っており、その瞳は右と左で僅かに色が違う。

先程まで、こんな少女は居なかった。だが、髪の色とチラリと見

た女性の外見を思い出し、恐らく、先程まで彼女も身体強化系の魔法を使っていたのだろうと推測した。

そう考えるエルヴィンへと、彼女は笑みを浮かべるのが想像出来ない、冷静さしか見せない表情で、

「何故貴方が、カイザーアーツ覇王流を使えるのですか……？」

しかし、何処までも敵意の籠った声でそんなことを言ってきて、

……誰だ、この前髪がバナナみたいな女は。

エルヴィンは、何処までも失礼きわまりないことを考えていた。

きっかけは大事では無い。

大事なのはきっかけの先に位置するもの。

行くまで見えない、闇と光の先に待っているもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276ba/>

偽霸王と白髪少年

2012年1月11日12時46分発行